

2024年度 八戸学院大学

地域経営学科 一般選抜Ⅱ期

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

価値の多様化ということが言われはじめてから久しい。いや、そうではない。逆に価値はむしろ画一化されているという説もある。どちらも本当のように思える。たしかに、1 大多数の者が共通に信じている一つの大きな普遍的価値といったものは失われたようである。

かつて多くの人が生命を捨ててまで守ろうとした大日本帝国のような幻想的価値を今の日本人は国家に①フヨしていないし、子々孫々にわたって永遠につづく家という幻想は色褪^{いろあ}せたし、世間という幻想もあまり重んじられなくなったし、近代以降、欧米から輸入した進歩とか理性とかの価値の（A）性も信じられなくなったし、各人各様、それぞれ自分本位のばらばらな小さな限定された価値を信じて生きているように見える。しかも、その信じ方も、終始一貫ずっと信じつづけるとか、全身全霊をもって信じるとかいう信じ方ではなくて、ほかに信じるに値するものもないようだから、今のところとにかくこれを信じておきましょうといった信じ方で、都合がわるくなれば、たやすくほかのものに切り換えることができるかのようなものである。

しかし、各人がそれぞれ自分本位にばらばらにかりそめに信じているにしては、多くの人が信じている価値は意外と画一的である。教育ママは、子どもを一流大学に合格させることの価値を信じて、ほかのあらゆることを②ギセイにしようとするし、金を儲けて何かに使おうというのではなく、ただひたすら金儲けのための金儲けに人びとは熱中している。あるいは、何かの③シユミに楽しみを見出し、自分がその楽しみを味わうことしか眼中にない。楽しむことそれ自体に生きることを支えるささやかな価値を感じ、その価値を他の人びとと共有できる普遍的な価値になげようとはしない。そして、それぞれ自分の個性的好みにもとづいていろいろな服装をしているつもりの人たちが、実際には、ワンパターンの流行ブランド商品を身につけているのと同じで、楽しみの味わい方も2 類型的なのである。

そうしてみると、価値の多様化と画一化とは決して矛盾したことなく、同じ現象の両面のように思えてくる。その根本にはやはり、普遍的価値の崩壊がある。普遍的価値が崩壊したのは崩壊しただけの歴史的理由がある。ある一つの普遍的価値を信じた人たちが、それと矛盾し、対立する価値を信じている人たちを排撃し、差別して④ザンギヤクな行為を繰り返してきたということがあって、ある日ふと気づいてみると、そんなことをしてまで守らなければならぬほどの絶対性はどのような「普遍的」価値にもないことがわかってきたのである。そこで、普遍的価値というものは存在しないのだということになった。すべては相対的であって、どのような価値を信じていようが間違っているとは言えず、それぞれが勝手に信じていればいいのだということになった。

そこから、価値の（B）化ということが出てくるわけであるが、悲しいかな、人間は何らかの価値を信じ、それを自我の支えにしなければ生きてゆけず、しかも自分の信じる価値はできるかぎり多くの人びとに信じられているものであることを望むので、勝手にどのような価値を信じてもいいと言われても、それほど3自由の幅はないのである。そして、普遍的価値は崩壊しているわけだから、何らかの価値を信じていても、それが普遍的だと思って信じていたときのような自信はもてず、ひょっとしてとんでもないことを信じてしまっているのではないかとの疑いを拭い切れない。そこで、他の人たちが信じているように見える価値を、自分は確信をもてないままに、一応今のところ信じておくといったことになる。他の人たちが信じているように見える価値を自分も信じるという人が多くなれば、必然的に、価値は（C）化されるわけである。

したがって、価値が多様化されたと言っても、個人が選択できる価値の幅が広く豊かになり、無限に多様な生き方の可能性が開かれているということではなくて、ある価値を信じることによって個人が得ることができるものは

（C）になっており、また、価値が画一化されたと言っても、多くの人が一つの共通の価値を信じて⑤レンタイ|するということにはならなくて、つまり、同じ価値を信じていることが人と人とを結びつけるわけではなくて、ばらばらに同じ価値を信じているといった具合になっている。

わたしは現代を「嫉妬とはしやぎの時代」だと言っているが、4 普遍的な価値が崩壊すると、そこに自我の安定した基盤を見出せないので、人びとははしやいで目立つ以外に自分の存在を確認する方法がなくなり、また、同じ理由で他の人のことが絶えず気になり、嫉妬に狂わざるを得ない。

岸田 秀『ふき寄せ雑文集』より

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部1「大多数の者が共通に信じている一つの大きな普遍的価値といったものは失われた」とあるが、これと同じ内容を表している語句を、文中から八字以内で抜き出して答えなさい。

問三 (A)に入る語として適当なものを、文中から抜き出して答えなさい。

問四 傍線部2「類型的なのである」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 各自で好みを出しているが、表面的な華やかさに留まっていること。

イ それぞれに大きな違いはないけれども、微妙な点で個性的であること。

ウ それぞれ個性的なように見えながら、流行に影響されていること。

エ 一定の基準というものはないが、時代の好みを反映したものになってくること。

問五 (B)、(C)に入る語として適当なものを、それぞれ文中から抜き出して答えなさい。

問六 傍線部3「自由の幅」とあるが、このことを具体的に説明している語句を、文中から十二字以内で抜き出して答えなさい。

問七（ ）に入る表現として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア より豊かに イ 少なくとも豊かに ウ 一層貧しく エ むしろ貧しく

問八 傍線部4「普遍的な価値が崩壊すると、そこに自我の安定した基盤を見出せないので、人びとははしやいで目立つ以外に自分の存在を確認する方法がなくなり、また、同じ理由で他の人のことが絶えず気になり、嫉妬に狂わざるを得ない」とあるが、このことについて、あなたの考えを百字以内で答えなさい。

【Ⅱ】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

客は利休ひとりである。彼の大きな眼は、秀吉の操作のすべてをじっと見守った。それも大きい口の厚い唇は、頬の片側に窪みをつくって閉じていた。利休は瞬きもしなかった。なにかの注意や指図がなされることもなかった。黒い十徳の膝には、大きいからだ、大きい眼口に釣りあって大きい皺のよった両手が、彫りつけられたようにのっている。むしろ彼そのものが、釜の発する、なにか遠い山野からのような幽かなさわやいだひびきの中に、一箇の木像のごとく、寂寞と厳かに見えた。

秀吉が一種えたいの知れない（A）に捉えられるのは、この瞬間である。自分の輝きが急にきえ、影のうすい見すばらしいものになった気がする。そこにただ1黙って座っているものから来る、抵抗しがたい①イアツであった。しかしたて終わった茶を型通り利休のまえに運び、それが飲みほされ、茶碗がひかれ、後始末がすむといっしよに、秀吉は失われた権威をようやく取り戻す。利休はいち早く身をおこし、錦の小型のしとねを上座において彼を迎える。秀吉はもうにこやかな笑顔である。戦塵からしばらく遠ざかっているためにひろい額は白く、やや張った頬の下部も健康そうな肉づきで、信長が渾名した「禿げ鼠」の②オモカゲはみじんも残っていない。ただ昔ながらの、切れこみの深いふた皮瞼の眼尻に皺が見えても、惣髪で、頭蓋の中央に、短い棒のごとくに結びあげた髪の毛はまだ黒い。立身するほど身だしなみに気をつかい、③ハデ好みのお洒落になった秀吉は、白髪は伸びないように抜かせるのである。それに小柄な中肉で年齢よりは活き活きとしていた。ことに法体で黒ずくめの利休にくらべると華美な装いも手伝い一とまわりになお二つ上ちがうふたりは、老いたる伯父と甥くらいにしか見えかねないが、通い口に位置をかえた利休へ投げかける秀吉の視線にも、その間柄に似たようなどこか甘えた親愛があった。

2 秀吉はわざとなに気ないふうにきりだす。

「あんな工合でよかったかな。」

利休は大きな眼いっぱいに微笑を浮かべる。秀吉の点前を見守っていた顔つきとはがらりと変わって、こんな時の利休はなかなかの愛嬌者あいきょうものに見える。が、答えはほんの一音であった。

「まあ。」

でない時でも「まあ、まあ。」で、それ以上くさしもしない代わり、賞めほもしなかった。

利休はつねにこれを通したのだから、どんな批評をされるかは、秀吉にも前もってわかっていたはずである。にもかかわらずやつぱりたずねて見ないではいられないのは、ほかの茶頭（注9）たちなら、津田宗及にしろ、今井宗久にしろ、惜しみなく浴びせるであろう④シヨウサンはへつらいに過ぎないのを知っており、それ故にこそ、ほんのかりそめにも満足のいく言葉を、利休の口からききたいのであった。稽古ごとでは誰にもおきる子供っぽい気持ちも、秀吉の場合は、得がたいものほど無理にも得ようとする権威者の我意に裏付けられているので、「まあ。」や「まあ、まあ。」でかたづけられるのが口惜しかった。

つづいて秀吉が客になり、利休にたてさせる。もう一度学ぼうとするより、3この命令にはいく分あら探しが隠されていくはない。利休のほうは知らぬふりではじめる。たった今秀吉が行った通りの仕方と手順で道具もそのままなのはいうまでもない。ただ違うのは、道具のひとつひとつが利休の手の触れるのを待っており、彼が取り上げるというより、道具の方からそれぞれに動いて運びをつくっていく感じであった。利休のこうした点前にくらぶれば他の茶頭たちは真似ごとをしているに近かった。秀吉のひそかな⑤カンシは、しだいに純粋な感嘆、満足にかわっていく。これほどの男を勝手にできる誇りが、あらたに強まるのもこんな時である。

野上彌生子『秀吉と利休』より

（注1） 十徳…じつとく。 室町・江戸時代の衣服の一種。 （注2） 寂寞…せきばく。 ひっそりとした様子。

(注3) しとね：敷物。(注4) 戦塵：戦場に立つちりやほこり。(注5) ふた皮臉：ふたかわめ。ふたえ臉まふたのこと。(注6) 惣髪：そうはつ。髪全体を伸ばして後ろで束ねる髪型。(注7) 法体：ほつたい。出家した僧侶の姿。(注8) 点前：てまえ。茶の湯の作法。(注9) 茶頭：さどう。茶の湯をつかさどる頭かしら。

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (A)に入る語として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 畏敬の念 イ あやしさ ウ 気おくれ エ 恐ろしさ

問三 傍線部1「黙って座っているもの」を比喩的に表した語を、文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部2 「秀吉はわざとなに気ないふうにきりだす」とあるが、このようにきりだしたのは、秀吉が利休に何を知られたくなかったからか。文中の語を用いて五十字以内で答えなさい。

問五 傍線部3 「この命令にはいく分あら探しが隠されていなくはない」とあるが、その理由を文中の語を用いて四十字以内で答えなさい。

〈問題終了〉